

を配膳したり、シヨップ内を移動しながら床を掃除していたりと、身近に増えている「働くロボット」たち。慢性的な人手不足解消や従業員の負担減などに役立つ、と大きな期待を集めている。

そんななか、昨年11月、川崎市麻生区のUR虹ヶ丘団地に世界で初めてお目見えしたのが、空中配送するロープウェイ型ロボットだ。その名も「ソラカラ便」。高さ約10mの専用電柱にワイヤーを敷設。荷物を入れた専用ケースを吊したロボットがワイヤーを移動し、専用受取ボックスまで運搬する。利用者はスマホのアプリで商品を注文。到着通知が届いたら受取ボックスにQRコードをかざして商品を受け取る仕組みで、最短30分で「空から」スーパーの食品や吉野家の牛丼などを届けてくれる。

実際に利用している人にお話を伺

配送ロボット開発を始めました。ようやく実証実験ができる段階になり、今回、URさんの虹ヶ丘団地をお借りして世界初の都市部実験を開始。三者協働でロボットの効果や課題、利用頻度や利用目的のニーズの把握、生活への影響を調査しています」

実験の舞台となった虹ヶ丘団地は、東急田園都市線「あざみ野」駅と「たまプラーザ」駅、小田急小田原線「新百合ヶ丘」

駅からバス便を利用。緑豊かな環境である一方、丘陵地ならではの高低差があり、買い物物の利便性が課題の一つであった。今回の実験はその解決の一助となるのでは、とURの中原貴子は話す。「買い物する場所は近くにありますが、起伏が



空中配送ロボットが荷物をおろす様子。左は注文した団地にお住まいの方が荷受けしている。



空から牛丼をお届け！ 社会課題を解決する空中配送ロボットが登場

神奈川県川崎市 虹ヶ丘団地
郊外住宅地における空中配送ロボット
実証実験 2023年●令和5年～



阿部民子 text by Tamiko Abe
Illustration by Shigeyuki Sakata

「利用は2回目で、お菓子を買いました。天気が悪くて買い物に行きたくない、お腹が空いたけどご飯を作りたい、お腹が空いたけどご飯を作りたい女性。団地内に勤務しているという女性も2回目の利用。「ランチのお弁当を購入しました。お昼休みにお弁当を買いに行く時間がないときなどに、とても便利。帰宅時間に合わせて必要なものを頼んで、帰りにピックアップできるというなと思います」。今回で3回目の利用という男性は、お惣菜とお菓子、ジュースを購入。「近くに宅配ボックスがないので、ネットで買ったものを配送してもらえると助かりますね。宅配ピザとかドラッグストアの商品

あるので、ご高齢の方などからよりラクに買い物できると助かるとお声がありました。そういった方々にご利用いただき、買い物物の利便性向上につながればと思います」

◎団地を多世代が集う拠点に

『郊外住宅地に共通する地域課題の解決や地域活性化、魅力づくり、持続的な価値向上を計るため』と、始まった今回の実証実験。東急のプロジェクト開発事業部 沿線戦略推進グループ 事業企画担当の清水寛之課長は、「今は荷物を受け取るだけです。双方向のやりとりで処方箋を出して薬を受け取ったり、クリーニングの受け渡しをするほか、カメラをつけて防犯機能を付加し、女性が夜間歩くときに見守るなどの可能性も考えられそう。この地がさまざまな機能を集約した拠点となることで、郊外の新たなまちづくりの在り方を提案できるのでは」と今後の展望を語る。「通常の市街地では認可などに1年以上かかるところ、URさんの所有地のため短期間で設置でき、感謝し

も頼めると便利かな」と話す。取材時は20〜40代が目立ったが、上は80代までと幅広い年齢層が利用しているという。

◎物流や買い物の課題を解決

「ソラカラ便」は、パナソニックホールディングス（以下パナソニックHD）と東急、UR都市機構の三者連携での実証実験によるものだ。パナソニックHDはロボットの開発、設備設置と運用、注文アプリなどを担当。東急は、行政や沿線住民との調整役に加え、ラストワンマイルのモビリティ施策などの検証。URは場所の提供と住民理解や行政協議などのサポートと、三者三様のノウハウを活用して、協働で実証実験にあたっている。

パナソニックHD E&S研究所の青山秀紀さんが狙いを説明する。「物流業界では、2024年問題や少子高齢化による人手不足が顕著になっていきます。そうしたなか、これから絶対的に必要なのが、配送の省人化・無人化です。我々は、その課題解決に向けて、約3年前から空中

ています。空中配送ロボットは時間が正確で安全性が高く、静音、省電力のため、太陽電池での運用も可能です。試行以来、予想以上に多くの方にご利用いただいているのもうれしですね」とパナソニックHDE&S研究所の大嶋光昭所長。

URの中原は、団地ならではの課題解決とその未来に思いを巡らす。「受取場所を外に設置することで外出の機会をつくり、そこに人が集うことも狙いの一つです。受取場所の団地広場が平常時にはコミュニティ拠点となり、有事には物資が届く防災拠点になる未来もあるかも。また、こうした便利な設備が若い人への訴求力となり、我々の目指すミクストコミュニティにもつながり、この場所を中心に、団地が地域のハブ的機能をもつようになればと期待しています」
虹ヶ丘を渡る配送ロボットは、未来への架け橋となる可能性を秘めている。